梅谷文庫
12

椎名麟三全集

12

戯曲 2

冬樹社

椎名麟三全集12

昭和四十七年九月二十五日初版第一刷発行

著　者—椎名麟三
発行者—高橋直良
発行所—冬樹社　東京都千代田区神田神保町二—一八
　電話東京二六四—〇三四六　振替東京七七五七
印刷所—三容堂印刷株式会社
製本所—一重製本株式会社
装幀者—栃折久美子
写　真—林忠彦
定　価—二〇〇〇円
© Rinzo Shiina 1972
0391-02012-5190

第十二巻目次

蠍を飼う女 …… 3
天国への遠征 …… 95
夜の祭典 …… 135
われらの同居人たち …… 239
不安な結婚 …… 321
鳥たちは空をとぶ …… 425
無邪気な犯罪 …… 513
長すぎる瞬間 …… 555
荷物 …… 567
解説 …… 高堂要 599

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

戲曲 2

蠍を飼う女

三幕

人物　吉沢　克己
〃　しず
〃　とき子
〃　健次
大森　愛吉
両角　正男
尾崎　良子

第一幕

高い崖下にある平屋の居間（八畳ぐらい）。上手に玄関や台所や三畳の茶の間があるが、今は、玄関は使用されていない。今年の夏の崖くずれでふさがれてしまっているからだ。茶の間とは、ふすまで仕切られている。八畳の奥は押入れとそれにつづく床の間にあたる部分が小窓になっている。ミシンやタンスなどがある。そうひどい暮しでもない。そして下手の壁は、ガラス戸の二枚はまった窓になっていて、いまは、出入りはほとんどこの窓から行なっている。もちろん崖くずれのためだ。その跡は、まだ取り片付けられずにそのまま残されていて、下手に転がり出した石や岩が見え、それらは縁側のあたりまで侵入して来ている。もちろんその縁側から出入りできないことはないが、多少の冒険を冒す必要がある。その土砂のために、家全体が幾分かしいでいて、どことなく不安定だ。

夜である。部屋のなかに電燈がつき、和服姿の吉沢克己が、半ばひらいた窓に向っていつまでもじっと立っている。まるで自由な世界が、向うにでもあるように。彼は、家にいるときはそうしているより仕方がないのだ。その後ろに結んだ帯は、だらしなく解けている。

その部屋の押入れの前に、蒲団が敷いてあって、克己の妻のしずが寝ている。枕元に薬瓶がおいてあるので、どこかわるいので寝ているということがわかる。しかしいつもの胃弱なのだ。

そのときふいにモダン・ジャズが聞え、克己の前の窓が大きくガラリとあいて、トランジスター・ラ

ジオを嬉しそうにもった健次が入って来る。

克己　健次、どこへ行っていたんだ。

健次　（ラジオを低めて）友だちんところだよ。山田のところへ行ってこれを借りて来たんだよ。ちょっと聞きたい音楽があったんでね。姉さんは？　もう会社から帰って来た？

克己　（隣りを指し）台所で後片付けしてるよ。

しず　あなた！　あなたは健次のいうことなんか信用してんの？　友だちのとこへ行って来たなんて。

克己　どうして？

しず　わかってるじゃないの。まだ学生のくせに、どこかで女とふざけていたんだよ。全く外で何をしているかわかったもんか、うちの子供たちは。

健次、古びた寝椅子のところへ行き、モダン・ジャズにきき入る。

しず　健次、うるさいじゃないか。

健次、ラジオをとめる。

間。またラジオをかける。

しず　うるさい！

瞬間ラジオをとめ、不思議そうにラジオを見ながら首をひねる。そしてまたラジオのスイッチを入れる。

しず　うるさい！

健次、ラジオをとめる。

健次　全く不思議なラジオだ。妙な声が聞える。（ラジオのスイッチを入れる）

しず　うるさい！

健次、その前にもうラジオのスイッチを切っている。

健次　（独言のように）ふむ、不思議なラジオだ。

しず　母親をバカにするがいい。みんなしてわたしを殺して行くんだ。一体、この家のなかは何なの。地獄じゃないか。それともこの家のなかになにかあるというの。お父さんは、もう五ヵ月したら定年だというのに、帰って来たって、ただぼんやりしているだけだ。（克己へ）あなた、一体、何のために、いつも、その窓のところへばかり立っているの！

克己　いや、その、崖くずれを見ているだけなんだ。

しず　嘘つき！　あなたは、何も見てやしないんだ。え、一体、何が見えるもんですか、あなたなんかに。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（冷笑）あなたには、三日先のことだって見えやしないんだ。

克己　（がっかりして）おかあさん、そういうけどね、おれは……。

しず　あなたは、いままで一度だってわたしに、ああ楽しかったという思いをさせてくれたことがある？わたしは、自分の過去を後悔しているのよ。あの健次だって、生れたときから病気ばっかりだったし、病気しなくなったと思ったら、親に楯ついてばかりいるんだからね。戦争がすんで間もなく肺炎にかかったとき、普通なら、あの健次は死んでいたんだ。あのとき打ってやったペニシリン、わたしがどんなことをして進駐軍から手に入れたか、あの子は知らないんだ。いま、台所でごそごそやっているとき子だってそうだよ。男ばかりつくって、今度の男は、おくさんも子供もあるというじゃないか。きっと、また、今夜も、あの男平気な顔をして、とき子を誘いにやって来るにきまってる。図々しいやつってありゃしない。

健次　おかあさん、ちょっと訂正。姉さんは男ばかりつくっているというけど、その両角正男という男は、まだ二人目なんですからね。

しず　二人だって多いじゃないか。おかあさんなんか、いまのお父さん、ひとりなんだからね。

健次　そんなことは、あんまり自慢にならないと思うな。

しず　何も自慢してやしないさ。あの両角、いやな男だといってるんだよ。

健次　そのくせ、両角さんの前には頭があがらないくせに。

しず　そんなことないよ。

健次　両角さんが今晩来りゃ、わかるさ。

しず　今晩来たら、追いかえしてやるよ、大体、とき子もきたならしいよ。あの男にはおくさんだけでなく、

子供が三人もいるというんだからね。

健次　六人、三人じゃなく六人。

しず　六人も！　ふむ、よく生んだね、そんなに。

健次　おれの責任じゃない。

しず　とき子は、子供は三人といった。あの子は、わたしをいままでだましていたのね。

健次　姉さんが、三人といったら、そんなら三人かも知れない。

しず　何をいうの、お前は。わたしは病気なのよ。その病気の親をからかって！

健次　三人も子供もあるといっておどろいているからだよ。子供が一人だったらかまわないというのかい、おかあさんは。

しず　一人だったら、罪はかるいわよ、三人よりも。

健次　罪？　罪って何だね。

しず　それでも大学生なの。アルバイトしている、しているといいながら、一銭も家へ入れないで何のために大学へ通っているの。

健次　おれは、そんなこと、知りたくないんだ、もっとほかに知りたいことがたくさんあるんでね。

しず　前の男とどうして別れたんだろ？

健次　だって、おかあさんは、あの男もきらいだったじゃないか。大森愛吉という男をだよ。

しず　おでんやじゃないの、屋台店の。あんな商売は、おじいさんや、おばあさんのやることだよ。

健次　おかあさんのようなおばあさん？

しず　（克己へ向って）あなた！　親に向ってこんなことをいわせておいてもいいんですか、自分の子供に！

克己　（窓からはなれて）おれは、ただな、何も彼もどうしていいかわからないんだ。
しず　一度ぐらい叱ってみなさい、自分の子供を。
克己　健次が何かいったのかい？
しず　（おどろいて）あなたはいまの健次のいい草を聞いていなかったんですか？
克己　ただ、そのう、いま、おれは……。
しず　あなた、一度ぐらい、はっきりしなさい！
克己　たすけてほしいんだ。ほんとにわたしは誰かにたすけてほしいんだ。
しず　たすけてくれ？　一体誰がたすけてくれるもんですか！

克己、うろうろ三畳の方へ去る。

しず　お父さんは、このごろどうかしてしまってる。みんな死んでしまえばいいんだよ、お前もとき子もお父さんも、みんな死んでしまえばいいんだよ。そうだよ。今度、大きな崖くずれが起ったら、今度こそ家はペシャンコになってしまうにちがいないから、それでみんな死ねるよ。
健次　おかあさんもね。
しず　そうよ、わたしもよ、（ふいに激怒して）お前！（と枕元にあった薬瓶をふり上げる）

とき子、入って来る。

とき子　何をしてるの、おかあさん。
健次　おかあさんは、いまから百五十五円損をしようとしているところなんだ。
とき子　百五十五円？
健次　健康保険だといっても、百五十五円払わなければならないんだろ、あの水薬は！
しず　わたしは、お前たちにうまうまだまされたんだよ。健次は、もちろん、とき子お前にもだよ。わたしはお前を新制大学まであげてやった。
健次　姉さん、礼をいわなければだめじゃないか。
とき子　どうして？　わたしが、わたしを大学へやったことなんか、新しい下駄を買ったことと同じだったじゃないの、おかあさんには。おかあさんは、あのころ、わたしを大学へやってることを会うひとごとに自慢したわ。新しい下駄を自慢したときと同じ調子でね。でも二年生になるかならないうちに何もいわなくなってしまった。
しず　お前が不良になったからだよ、不良の仲間とつき合ってだよ。
とき子　まだ、そう思ってるのね、おかあさんは。
しず　変な男たちとつき合って、まるでパンパンじゃないか。
健次　おかあさんは、姉さんのこと、何もわかってやしないんだ。おれは、あのころまだ中学生だったけどな、とにかく奴等が、この世のなかに何かしようとしていることぐらいはわかっていたな。
しず　何をしようとたくらんでいたんだ？
健次　つまり世のなかを変えたり救ったりするようなことさ。そのときの旗頭が、大森愛吉さんや両角正男さんというわけさ。

しず　お前こそ何も知ってやしないよ。え、健次、いいかい、あのころとき子は、わたしに死んでしまったほうがいいなんていうことをいったんだよ。わたしは、死んでも忘れやしないよ。

とき子　いまでもそう思ってるわ。

しず　そうなのよ、お前は！　一体これが自分の子供だろうか！　わたしの生んで育てた子供だろうか！

とき子　ほかにしなければならないことがたくさんあったのにね。

しず　（不安になって）何だね、それは？

とき子　きっとそれはおかあさんのできなかったことよ。でなければ、おかあさんはいつも後悔しているわけはないもの。でも、わたしは感謝してるのよ。

しず　何を？

とき子　こんな立派すぎる世のなかへ生んでもらったってこと。街を歩いてごらんなさい。みんな幸福で幸福で死にそうだというような顔をしてるわよ。

しず　とき子、一体、お前は今度は、何をたくらんでいるんだい。

とき子　たくらんでいる？　それがおかあさんのわるいところなのよ、いつもひとを邪推してばかりいるのよ。

しず　警察は、もうごめんだからね。

とき子　わたしは何もしないわ、大森さんと両角さんとが喧嘩をしたというだけじゃないの。

しず　警察は、それだけとは思ってやしなかったよ。

とき子　それは警察の勝手だわ。

健次　傍から口を出しますけどね、おかあさん、あのころ姉さんは悩みはじめたというだけなんだよ。あの

ころおれは、中学生だったけど、そのくらいわかっていたな。

しず　それと警察とどんな関係があるの？

健次　悩みというのは、究極のところ警察につながっているらしいんだ、この世では。

しず　その悩みというのは何なの。

健次　それは姉さんだけにしかわからないことだよ。姉さんの決して口にしようとしないことだね。

とき子　健次、およし。……おかあさんにいったって何もわかりゃしないんだから、おかあさんは、二十五のときお父さんと結婚していま五十一よ。つまりこの二十六年間、おたがいに相手にうっとうしい思いをしながら暮して来ていて、それに気もつきやしないんだからね。

しず　とき子の悩みが何だぐらいわかっているよ、男にきまってる。温泉マークに男と一緒にいなければ落着かないんだからね。

健次　おかあさんの想像は、このごろどうも下がかっている。

しず　お前こそきたならしい！　おだまり！

健次　（さとすように）あのころはね、おかあさん、朝鮮戦争が終って、スターリンが死んだころだったんだよ。しかもそのスターリンの次に水爆がやって来た。水素爆弾だよ。絶対というものがグラグラしはじめたころなんだ。水素爆弾に人類の滅亡という絶望を見出すべきなのか、それとも戦争はなくなるという希望を見出すべきなのかさっぱりわからなくなったころなのだよ。おれはまだ中学生だったけど、学校でよくそのことを議論したな。その問題は、結局いつも人間というものが信じられるかどうかという問題になって行った。そしてそこでわからなくなるのが例だった。おれたちは、少なくとも自分が信じられるとはどうしても思えなかったからな。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com